

哲 学

教授 田 辺 正 英

1. 研究概要

- 1) 人間における実存と安らぎの問題
 - 2) 日本仏教における親鸞や蓮如の思想を通しての罪や悪と救済の問題
 - 3) キリスト教における罪と救済の問題
(K. バルトやR. ニーバーの思想を通して)
 - 4) 西田哲学や田辺哲学の絶対無の問題
- 以上の4項目は第1輯(研究活動一覧)1976・1977に述べたことと大体同じであるが、4)の項目のみレジュメの形で述べると次の如くである。

絶対無と宗教体験

絶対無は本来仏教にその系譜をもつ概念であることは『神と絶対無』(西谷啓治著)に指摘されているが、西田幾多郎博士と田辺元博士の絶対無についてその相違を考察したい。

西田博士の最後の論文といわれる『場所的論理と宗教的世界観』においては、宗教は価値の問題ではなく、我々が自己の自己矛盾的存在であることを自覚したときに、我々の存在そのものが問題となり、宗教の問題が起ってくるとされる。従って西田哲学における絶対は極めて宗教的なものである。すなわち絶対無は「最も深い意味において宗教的体験の事実」として捉えられる。絶対無は西田哲学において、いわゆる非合理的な宗教体験と深い関係にあるばかりでなく、いわゆる自己そのものの無的主体の意味を荷うものであって、禅そのものの悟りの内容とその論理を示しているものともいえる。西田博士は絶対無が神秘主義的に捉えうることを顧慮して、自己の「場所的論理の立場においては、絶対否定即平常的である」とし、絶対無はあくまで宗教的に現成すべきものとして捉えられる絶対無の弁証法は、田辺博士の絶対無の弁証法とは次の点において相違する。すなわち田辺博士は、西田博士の絶対無を直接無媒介的な神秘主義に傾くと批判しながら、絶対媒介の哲学として、自己の絶対無の媒介の弁証法を展開する。すなわち絶対無は絶対否定を通して自己の本源に帰ることを意味するのではなく、あくまで現実において、理性の自律が必然的に行き詰り、自力の絶望的な自己放棄たる懺悔を通じて、他力的に転換せられる絶対媒介の弁証法的論理の展開を意味するのである。ここでは絶対無が絶対の矛盾分裂すなわち危機に現成して相対的有を復活せしめる大非即大悲として捉えられる。西田哲学では絶対無は現成

すべき主体的なものであるが、田辺哲学では絶対無はあくまで絶対否定における媒介契機であることに相違を捉えうるのである。

2. 学会報告

1) 田辺正英：宗教体験と絶対無，日本宗教学会学術大会(第37回)，1978.11，東京。

3. 刊行論文・著書等

1) 田辺正英：宗教体験と絶対無，宗教研究，第52巻第3輯，238号，p.89～91。

歴 史 学

助 教 授 小 沢 浩

1. 研究概要

1) 近代日本における民衆宗教運動の歴史的意義について——目下教派神道体制下の金光教について研究を続けているが、近くその中間報告を「民衆宗教における“近代”の相剋——教派神道体制下の金光教」と題して、『日本史研究』に発表の予定。

2) 幕藩体制下における民衆の宗教意識の特質について——最近水戸藩における地域研究に一応のまとまりがついたので、その成果の一部を『勝田市史近世編』で発表した。(下記出版刊行物目録参照)

3) 1930年代の反宗教運動の研究——基本的な文献の收拾にめどがついたので、逐次分析的な作業に取り組んでいきたい。

なお、詳細については第1輯を参照されたい。

2. 刊行論文・著書等

1) 勝田市史編さん委員会『勝田市史・近世編』勝田市，1978。

近世初期の村落と宗教，p.482～502。

寛文・元禄期の社寺改正，p.503～524。

農民の信仰生活の変遷，p.684～710。

天保期社寺改革の背景，p.991～998。

天保期社寺改革の実態，p.999～1010。

法 学

助 教 授 阿 原 稔

1. 研究概要

昨年度と同様、(イ)「医療保障論」(ロ)「医事法(制)」についての共同研究と、「民事免責の法構造」等の個